日蓮大聖人御書全集

上野殿御返事（須達長者御書）

うえのどのごへんじ

すだつちょうじゃごしょ

新版
1918
〜
1919

上野殿御返事（須達長者御書）

弘安3年('80)12月27日　59歳　南条時光

鵝目一貫文、送り給び了わんぬ。御心ざしの候えば申し候ぞ。よくふかき御房とおぼしめすことなかれ。仏にやすやすとなることの候ぞ。おしえまいらせ候わん。人のものをおしうると申すは、車のおもけれども油をぬりてまわり、ふねの水にうかべてゆきやすきようにおしえ候なり。仏になりやすきことは別のよう候わず。旱魃にかわけるものに水をあたえ、寒氷にこごえたるものに火

をあたうるがごとし。また二つなき物を人にあたえ、命の
たゆるに人のせにあうがごとし。

金色王と申せし王は、その国に十二年の大旱魃あって、
万民飢え死ぬることかずをしらず。河には死人をはしとし、
陸にはがいこつをつかとせり。その時、金色大王、大菩提心
をおこしておおきに施をほどこし給いき。せすべき物みな
つきて、蔵の中にただ米五升ばかりのこれり。「大王の一日
の御くごなり」と臣下申せしかば、大王、五升の米をとり出
だして、一切の飢えたるものに、あるいは一りゆう二りゆう、

与 ふた もの ひと 与 いのち
絶 ひと 施 遭
こんじきおう もう おう くに じゅうにねん だいかんばつ
ばんみんう し 数 知 かわ しびと 橋
くが 骸 骨 塚 とき こんじきだいおう だいぼだいしん
発 大 せ 施 たま 施 もの 皆
尽 くら なか こめごしょう 残 だいおう いちにち
しんかもう だいおう ごしょう こめ 取 い
ご 供 御
いっさいう 者 いち 粒 に 粒

あるいは三粒(さんりゅう)四粒(しりゅう)なんど、あまねくあたえさせ給(たま)いてのち、天(てん)に向(むか)かわせ給(たま)いて、「朕(ちん)は、一切衆生(いっさいしゅじょう)のけかち(飢渇)の苦(く)にかわりて、うえしに(飢死)候(そうろう)ぞ」と、こえ(声)をあげてよば(呼)わらせ給(たま)いしかば、天(てん)きこ(聞)しめして甘露(かんろ)の雨(あめ)を須臾(しゅゆ)に下(ふ)らし給(たま)いき。この雨(あめ)を手(て)にふ(触)れ、かお(顔)にかかりし人(ひと)、皆(みなじき)食(じき)にあ(飽)きみち(満)て、一国(いっこく)の万民(ばんみん)、せち(刹那)なのほどに命(いのち)よみがえ(蘇)り候(そうら)いけり。

月氏国(がっしこく)にす(須)達長者(だつちょうじゃ)と申(もう)せし者(もの)は、七度(しちど)貧(ひん)になり七度(しちど)長者(ちょうじゃ)となりて候(そうら)いしが、最後(さいご)の貧(ひん)の時(とき)は、万民(ばんみんみな)皆(みな)にげう(逃)せ(失)死(し)にお(終)

わりて、ただめおとこ二人にて候いし時、五升の米あり。五日のかってとあて候いし時、迦葉・舎利弗・阿難・羅睺羅・釈迦仏の五人、次第に入らせ給いて、五升の米をこいとらせ給いき。その日より五天竺第一の長者となりて祇園精舎をばつくりて候ぞ。これをもって、よろずを心えさせ給え。

貴辺はすでに法華経の行者に似させ給えること、さるの人に似、もちいの月に似たるがごとし。あつはらのものどもかかえおしませ給えることは、承平の将門、天喜の貞任のようにこの国のものどもはおもいて候ぞ。これひとえ

に法華経に命をすつるゆえなり。まったく主君にそむく人とは、天、御覧あらじ。

その上、わずかの小郷におおくの公事せめあてられて、わが身はのるべき馬なし、妻子はひきかくべき衣なし。かかる身なれども、法華経の行者の山中の雪にせめられ、食ともしかるらんとおもいやらせ給いて、ぜに一貫おくらせ給えるは、貧女がめおとこ二人して一つの衣をきたりしを乞食にあたえ、りたが合子の中なりしひえを辟支仏にあたえたりしがごとし。とうとし、とうとし。くわしくは、またま

た申すべし。恐々謹言。

弘安三年十二月二十七日

上野殿御返事

日蓮　花押